-ITSS Users' Conference 2007-

マーケティング出身のIT素人CIOが
ITSSに感じた可能性と事業会社がITSSを使う意義

2006年12月5日 (火)

株式会社 ドクターシーラボ
執行役員 神戸 聡

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

アジェンダ

①：当社概要

②：ITSS導入を決めた理由

③：ITSS導入フェーズ活動内容

④：オリジナルITSSと当社版ITSSの差異

⑤：今後の方向性

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

会社概要

【業績推移】

JASDAQ 上場

東証1部 へ鞍替え

期	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期
年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度
単体売上高	¥338,572,860	¥1,520,016,013	¥4,387,284,111	¥8,062,794,357	¥11,942,222,369	¥14,671,772,639	¥15,906,714,214
単体経常利益額	¥62,687,181	¥474,951,833	¥1,079,876,030	¥1,954,256,709	¥2,336,029,749	¥3,255,618,232	¥2,733,255,964
単体計上利益率	18.5%	31.2%	24.6%	24.2%	19.6%	22.2%	17.2%
IT投資費用				¥68,952,825	¥140,516,832	¥334,082,063	¥643,997,475
売上高IT投資比率	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	1.2%	2.3%	4.0%

IT投資費用は財務発表（設備投資は5年償却）の数字です。また、人件費は含まれておりません。

【IT部門人員構成】 2006年10月末現在

NO	所属	雇用区分	常駐･非常駐	職種大区分	職種小区分	NO	所属	雇用区分	常駐･非常駐	職種大区分	職種小区分
1	当社	社員	常駐	管理	管理	13	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	SE
2	当社	社員	常駐	管理	管理･ＳＥ	14	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	SE
3	当社	社員	常駐	WEB	SE	15	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	プロジェクトマネージャ
4	当社	社員	常駐	WEB	SE	16	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	設計･開発
5	当社	社員	常駐	アプリ	SE	17	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	設計･開発
6	当社	社員	常駐	アプリ	SE	18	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	設計･開発
7	当社	社員	常駐	アプリ	SE	19	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	開発
8	当社	社員	常駐	インフラ	SE	20	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	開発
9	当社	社員	常駐	インフラ	SE	21	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	設計･開発
10	当社	社員	常駐	管理	管理	22	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	設計･開発
11	当社	派遣	常駐	インフラ	運用	23	パートナー	業務委託	常駐	アプリ	設計･開発
12	当社	派遣	常駐	管理	運用･事務アシスタント	24	パートナー	業務委託	非常駐	インフラ	コンサルタント
						25	パートナー	業務委託	非常駐	インフラ	アシスタント＆アプリ開発支援
						26	パートナー	業務委託	非常駐	コンサル	コンサルタント

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

昨年9月に立てた新生情報システム部の方針

コストセンターからプロフィットセンターへの脱皮

例外なく、全ての開発案件･運用案件に【 **ROI**（投資対効果）】を試算する。

SCM･CRM･マーケティング･財務等あらゆる【 企業の側面 】に精通する。

情報システムが【 経営戦略 】の根幹であると常に意識する。

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

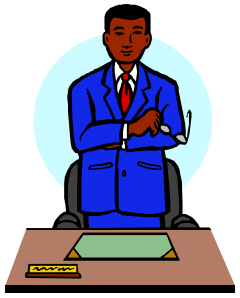
「昨年9月時点に感じたIT部門」では、ビジネス展開を支えきれないのでは…

■昨年9月時点のIT部門とは？

主な役割	・技術的ソリューションの提供
手法	・ITベンダーや、アウトソーサーへ お願いし、お任せする。
位置付け	・コストセンター。 ・経営から遠く、ITベンダーに近い。
課題	・プロジェクト成功のカギは、外部(ITベンダー、アウトソーサー)が握っている。 ・スキルの空洞化が発生。 空洞化がひどい場合、 単なる「IT受付窓口」になってしまう。

そのままだと？

- ●費用対効果が測れず、キャッシュ流出。
- ●やるべきことを、実現できない。
- ●やりたいことの実現度合いが把握できない。
- ●プロジェクトの赤字比率増大。
- ●プロジェクトの失敗確率増大。
- ●予期しないシステムの再構築　など。

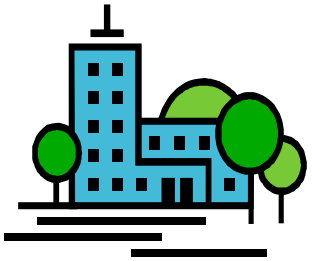


経営

遠

IT部門社員

近



ITベンダー

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

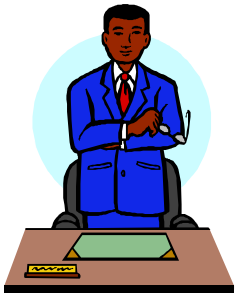
「昨年9月時点で理想としたIT部門」なら、ビジネスをサポートできるのでは…

■昨年9月時点での理想のIT部門とは？

主な役割	・ビジネスバリューを出す「IT」。 ・経営と密接なIT。
手法	・ITのスキル、ビジネスのスキルを もって、「トータルにITをマネージ」 する。
位置付け	プロフィットセンター。 経営から近く、ITベンダーにも近い。
メリット	・経営がやりたいことを理解し、 提案でき、実現できる。 ・投資効果を意識したITサービス が提供できる。

そうすると？

- ●「このITが、どんなビジネスバリューを精製しているのか」を説明できる。
- ●コストと、プロジェクトのマネージメント。
- ●変化への対応をリード。
- ●ビジネスへの付加価値を提供。
- ●正確な要件分析、要件定義で事前にシュミレーション。

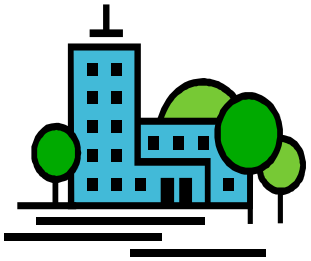


経営

近

IT部門社員

近



ITベンダー

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

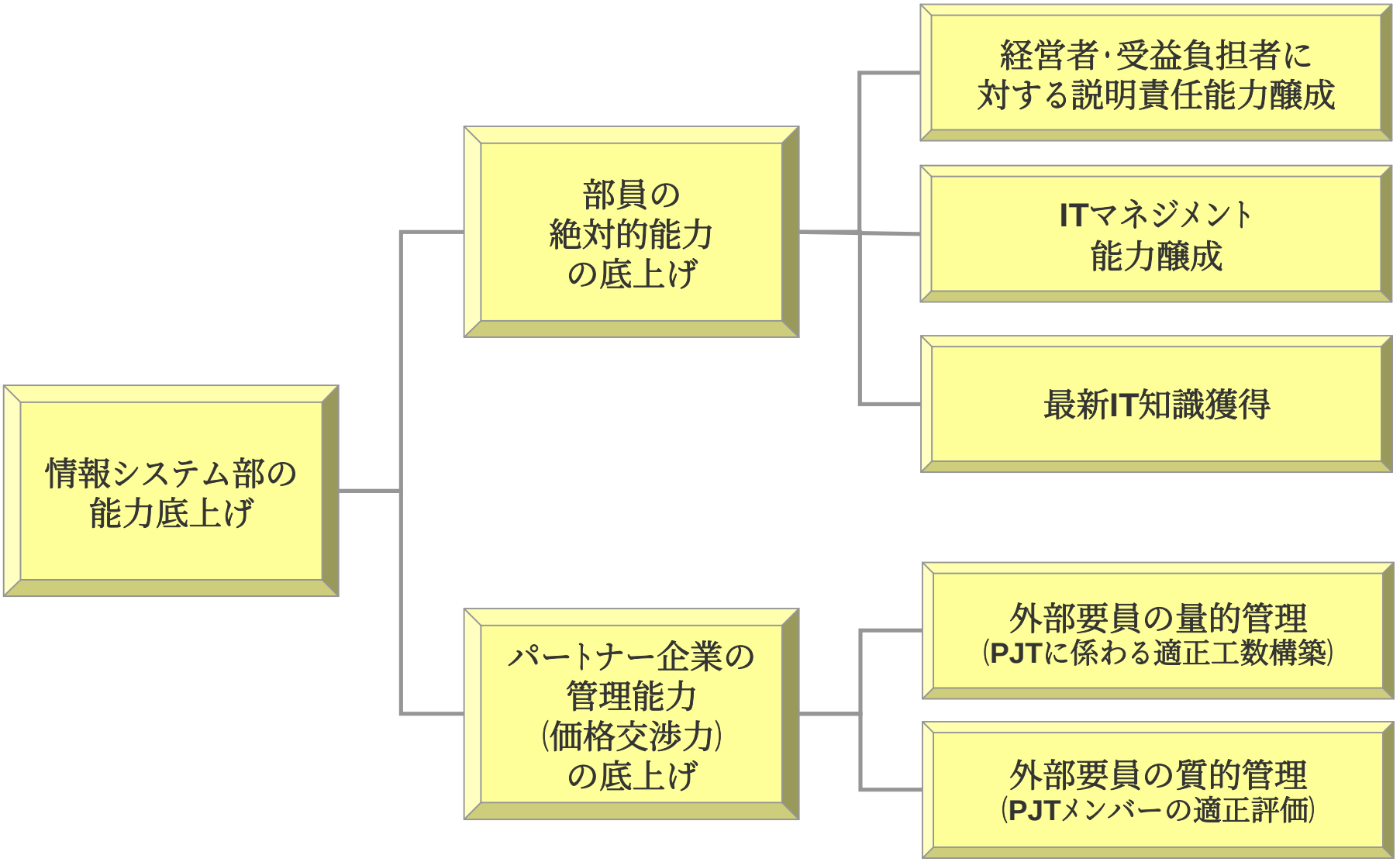
理想型のIT部門にとって、重要な7つのスキル

■「ITベンダー」ではなく、「従来型」でもない「理想のIT部門」として必要なスキル。

1. 本体の事業戦略に精通すること
2. 事業戦略に必要な、ITのアイデアを起案できること
3. 実現モデルを立案できること
4. システムへの投資について、事前にシュミレーション
   (実現とき、実現したあとの費用対効果) できること
5. 自らシステム案件のプロジェクトのタクトを振れること (イニシアティブ)
6. システム設計の土台づくり(要件分析、機能分析) ができること
7. 完成したシステムの仕組みを把握し、保守すべき事柄が分かること

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

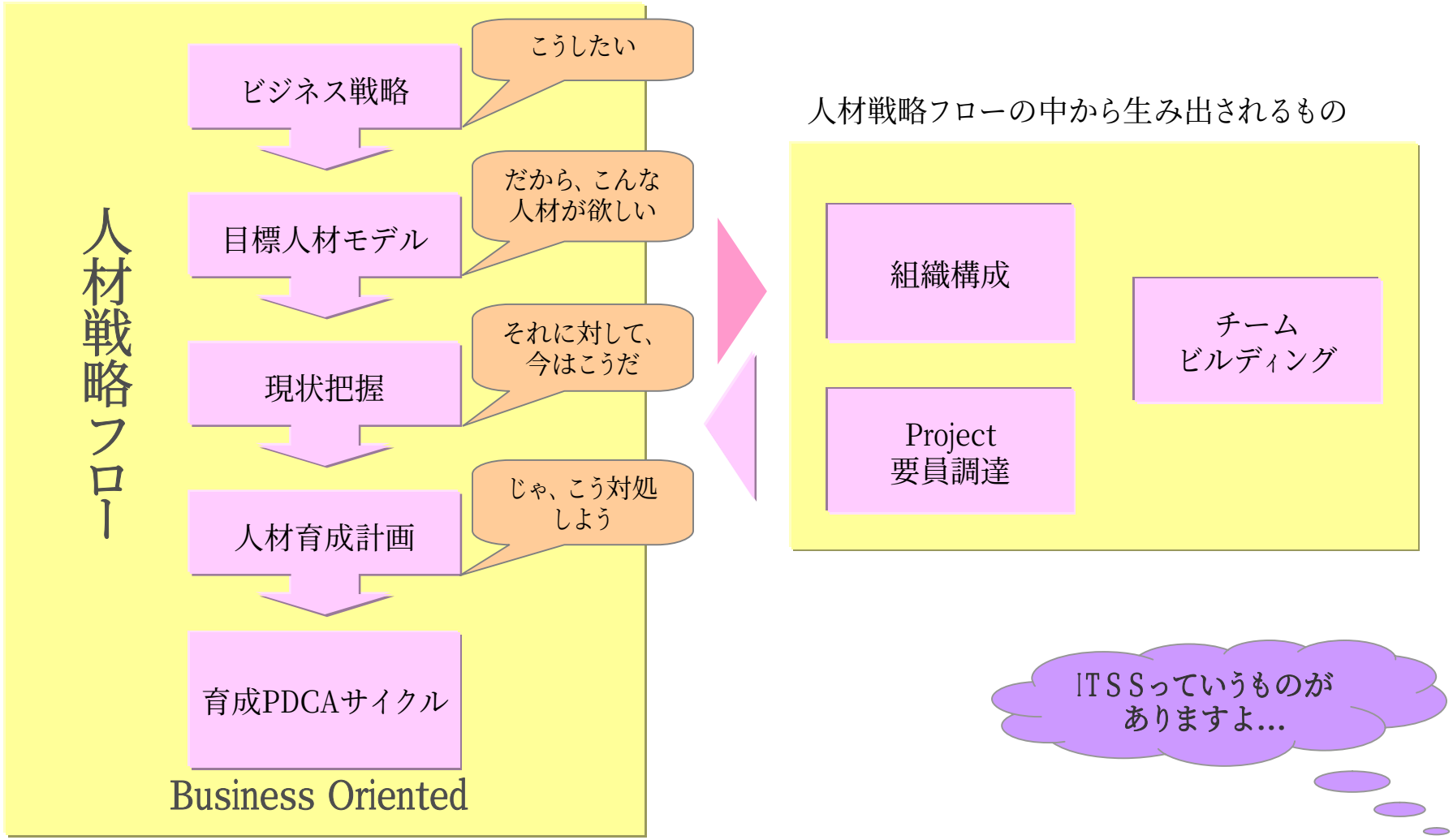
今年1月に立てた、次期（2006年2月～：第8期）に対しての課題



Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

理想的を実現するためには、具体的な人材戦略のフローが必要

■ヒトがいない。ヒトが採れない。ヒトが育たない。ビジョンを掲げても全てが“ヒト”のせいになって仕事が止まる。　　…ということは…
目標人材モデルができると、人材育成が活性化し、人材戦略フローが回りだすのでは…。



Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ITSSを導入することのメリットの方向感

事業戦略とつながる、IT人材戦略ポリシーを策定する

投資順位を決める

1. 事業戦略の立案

目標とするレベルを明確にし、自律した成長につなげる

不足しているITスキルを補完するための、教育･研修を調達する

2. 人材育成･成長

企業経営

売上向上＆利益向上

3. 外部調達コストの低減

個々のプロジェクトに必要なスキルを見積もる

ベンダーのＰＪＴメンバーが、スキルを充足しているか確認

4. 人材情報管理

スキル･経験を管理し、人材情報を活用する

組織の強みと弱みを把握する

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

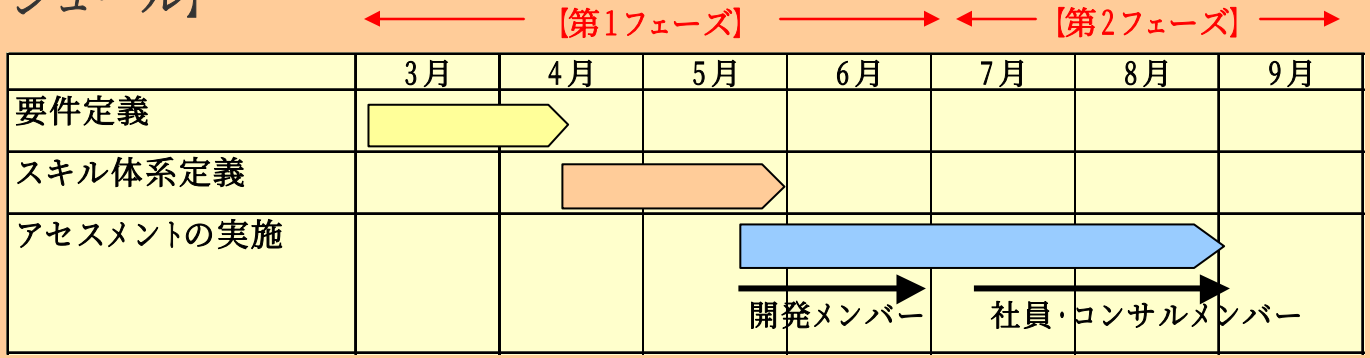
当社版ITSS（Ci:ITSS）導入の目的とスケジュール

【目的】

Ci:ITSSは、主に以下の目的を達成するために導入
スキル体系はその基盤となるものとして定義

- 社内情報システム部の組織能力の底上げ
  - ✓ ITSS（ITスキルスタンダード）をベースとした社内人材育成
  - ✓ 情報システム部門に対するスキルマップの明示
- IT人材ポートフォリオの最適化
  - ✓ 社内で保有すべきスキルとアウトソースするべきスキルの明確化
  - ✓ IT予算の最適化
  - ✓ パートナー企業の特徴を活かしたパートナーシップの実現

【スケジュール】



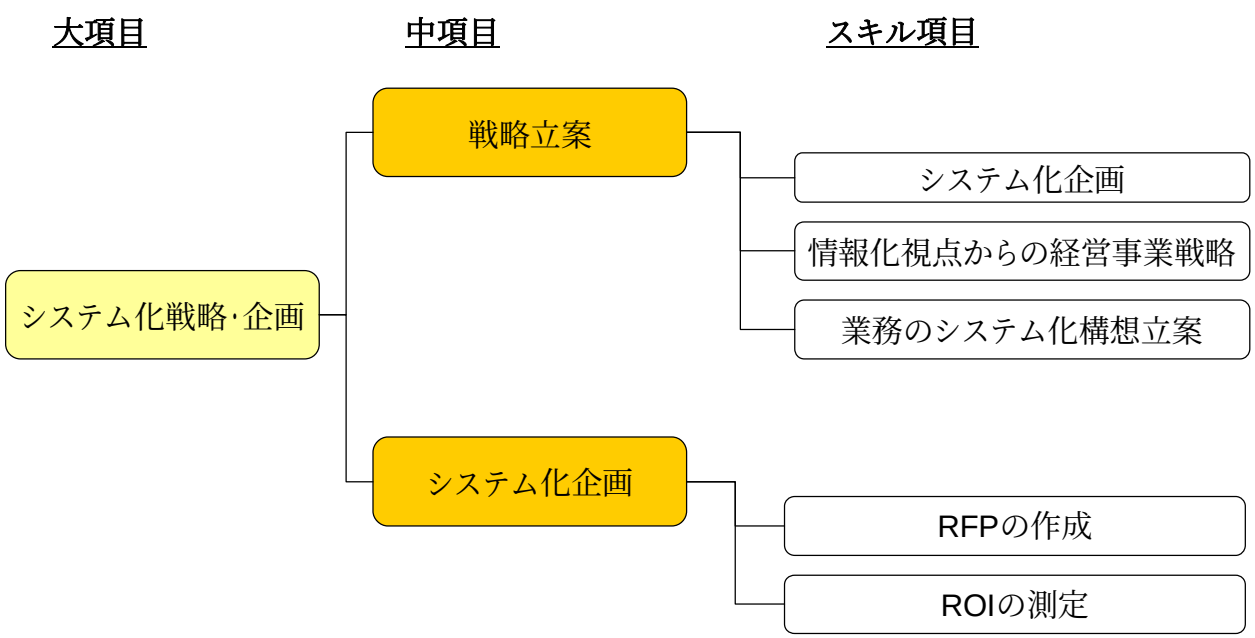
Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

導入フェーズ1:「スキルディクショナリ」の構成要素構築

「スキルディクショナリ」は、以下のように3つの階層で表現されている。

スキルディクショナリ「行動編」と「知識編」は、それぞれを組み合わせて使用することによって、必要となる技術と作業内容を表現しています。
（例）「ER図（知識スキル）」を使用して、
「データモデルの作成（行動スキル）」ができる。

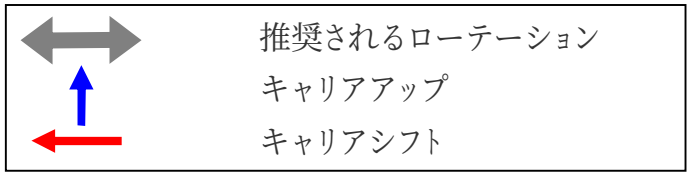
システム化戦略･企画
●戦略立案
○システム化企画
○情報化視点からの経営･事業戦略の立案
○業務のシステム化構想立案
システム化企画
○RFP（提案依頼書）の作成
投資効果(ROI)の測定



Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

導入フェーズ1:スキル体系・キャリアパス構築

Ci:ITSS　キャリアパスパターン　全体図



	職種	要求定義/要求分析	設計	実装	プロジェクト管理	専門分野	システム運用	クライアントサポート	コンサルティング
	職種名	アナリスト	アーキテクト	デベロッパ	プロジェクトマネージャ	プロダクトスペシャリスト	システムアドミニストレータ	サービスデスク	コンサルタント
	概要	顧客の経営・業務上の問題を分析し、システム化企画・開発範囲の定義・要求仕様書の作成等を行う。	顧客のシステム化計画、及び要求仕様に基づいて必要なソリューションの枠組みを策定し、システム基盤、ソフトウェア構造を設計する。また、システム構成要素における機能設計、データベース設計、運用設計も担当する。	システム構成要素のインプリメントとテスティングを担当する。	プロジェクトの計画策定、進捗管理、測定、変更管理、リスク管理を実施し、プロジェクトのスコープ、コスト、期間、契約上の成果物を管理することに対する責任を持つ。また、品質保証、リソース調整、構成管理、システム移行も担当する。	特定のプロダクト技術に精通しており、その導入、設定、カスタマイズを担当する。	自社システムの運用／監視、サービスの維持、障害予防および障害回復を行なう。	ユーザーからの各種問合せ、障害通知などに対するヘルプデスク業務を行なう。	特定分野に関する専門知識と豊富な経験を活用し、顧客が抱える問題に対する助言、指導を行う。
	コンピタンス	対象となる問題や業務の視点で物事を捉え、創造し、表現する	技術に関する幅広い知識を持ち、実現手段を組み合わせた試行錯誤して価値を創造する	目的を実現するため、所与の技術を使用して製造する	チームが目標を達成するために、計画・調整等の管理業務を行う	固有の技術分野に特化・深化し、専門家としての価値を提供する	システムが正常に運用できる状態を維持するための行動を行う	ユーザがシステムを利用し続けられる状態を維持するための行動を行う	保有する専門分野に関して、自ら能動的に顧客の問題を解決、または提案する。
6	(決定権者:経営的視野を持ち、全社的な観点から、IT部門における重要な判断を下す責任を持つ) <スコープ:　会社全体>	IT戦略			IT部門マネジメント				
5	(責任者:IT部門の視点から、自らの専門分野において重要な判断を下す責任を持つ) <スコープ: チーム全体～組織全体>	ビジネス分析	エンタープライズアーキテクチャ設計		リソースマネジメント プロジェクトマネジメント		運用マネジメント		コンサルティング
4	(専門家:自らの専門分野において、新たな価値を創造することができる) <スコープ:担当分野>	システム分析	ソフトウェアアーキテクチャ設計 インフラ設計 データベース設計		品質マネジメント	プラットフォーム システム管理 ネットワーク データベース 業務パッケージ セキュリティ		ヘルプデスクマネジメント	
3	(専門担当者:定められたルールや手順の中で、試行錯誤し、創造することができる) <スコープ:担当業務>	要求分析	アプリケーション設計	テスティング	プロジェクトマネジメント アドミニストレーション	データギャザリング	運用アドミニストレーション 移行管理	ヘルプデスク	※コンサルタント職域の認定は、 他領域の役割(4もしくは5)と関連付けられている必要がある。 コンサルタント単独での認定は許されない。 (例:ビジネス分析＋コンサルタント)
2	(担当者:手順を遵守して、主体的に実行することができる) <スコープ:担当作業>			テスティング		プロダクトセットアップ		テクニカルサポート インストラクション	
1	(作業者:手順に従って行動することができる) <スコープ:担当作業>						システムオペレーション		

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

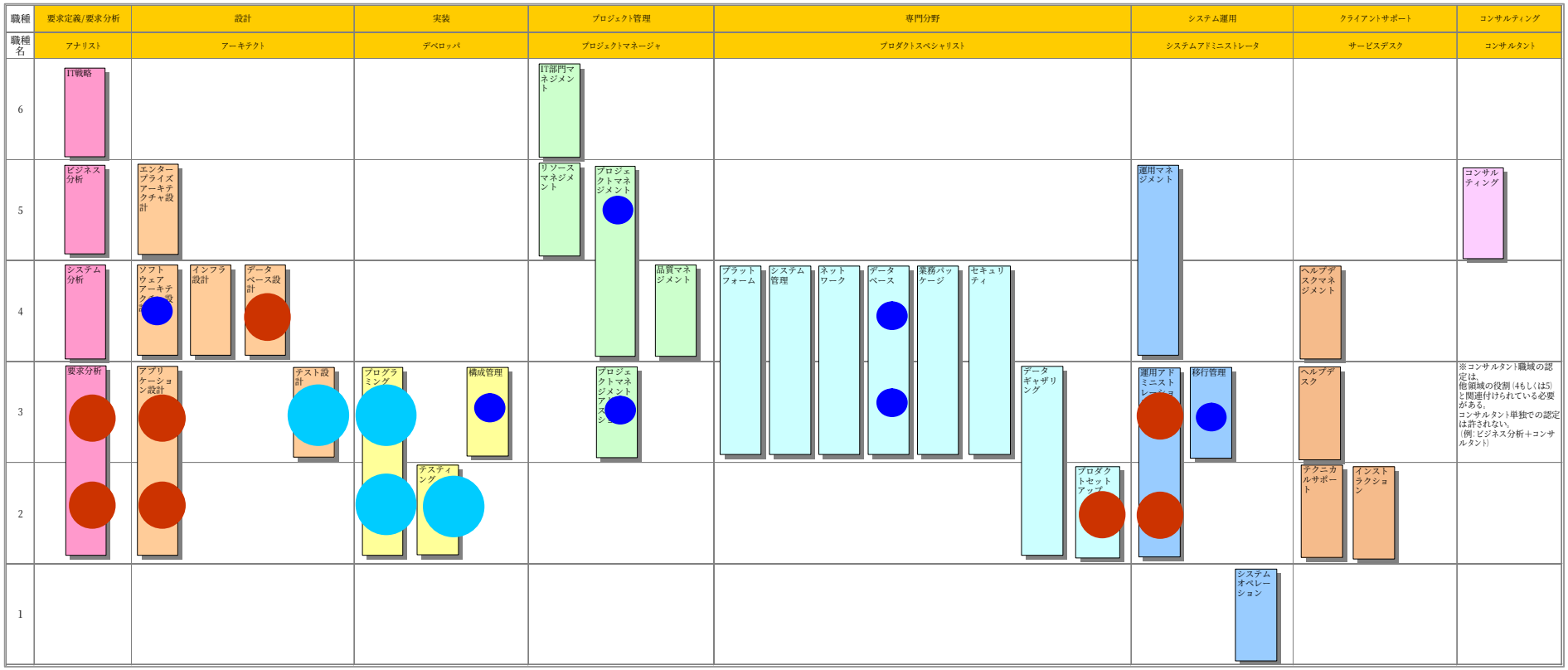
導入フェーズ1:外部開発要員の役割分析

No.	識別された役割 ※　アンダーラインは現在の役割	行動スキル(大項目)	知識スキル(大項目)
A	アナリスト:「要求分析(3)」 アーキテクト:「テスト設計」 **プロジェクトマネージャ:「プロジェクトマネジメント(4)」** システムアドミニストレータ:「移行管理」	業務分析 要求分析･定義 テスト設計 システム移行 プロジェクト計画立案/実行計画立案 プロジェクトコントロール リソース管理	ビジネス知識 要求分析手法 システム分析設計手法 ソフトウェア要素技術 プログラミング言語 テスティング マネジメント 運用保守
B	アナリスト:「要求分析(2)」 **アーキテクト:「ソフトウェアアーキテクチャ設計(4)」** アーキテクト:「データベース設計」 アーキテクト:「テスト設計」 デベロッパ:「プログラミング(3)」 デベロッパ:「テスティング」 デベロッパ:「構成管理」 プロダクトスペシャリスト:「プロダクトセットアップ」	要求分析･定義/要求分析 システム設計 ソフトウェアアーキテクチャ ソフトウェア設計 データベース設計 実装 テスト設計 テスト 構成管理 エンタープライズセットアップ	システム分析設計手法 アプリケーション技術 ソフトウェア要素技術 プログラミング言語 マネジメント 基盤技術-プラットフォーム 基盤技術-データベース 開発支援ツール テスティング
C	**アーキテクト:「アプリケーション設計(3)」** アーキテクト:「テスト設計」 デベロッパ:「プログラミング(3)」 デベロッパ:「テスティング」 プロダクトスペシャリスト:「プロダクトセットアップ」	ソフトウェア設計 実装 テスト設計 テスト エンタープライズセットアップ	システム分析設計手法 アプリケーション技術 ソフトウェア要素技術 プログラミング言語 基盤技術-プラットフォーム 基盤技術-データベース 開発支援ツール テスティング
D	アナリスト:「要求分析(3)」 **アーキテクト:「アプリケーション設計(3)」** デベロッパ:「プログラミング(2)」 デベロッパ:「テスティング」 プロジェクトマネージャ:「PMアドミニストレーション」 システムアドミニストレータ:「運用アドミニストレーション(3)」	要求分析･定義/要求分析 ソフトウェア設計 データベース設計 実装/基本プログラミング テスト プロジェクト計画立案 プロジェクトコントロール システム運用設計 システム運用 ドキュメンテーション	ビジネス知識 要求分析手法 システム分析設計手法 ソフトウェア要素技術 プログラミング言語 基盤技術-システム管理 マネジメント 文書化

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

導入フェーズ1：外部開発要員のポートフォリオ分析

- IT役割マップにおけるアウトソーサーの役割分布



Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

導入フェーズ1:外部開発要員の現在の配置との整合性

現在のプロジェクトにおける役割と適正が高いと思われる役割の比較

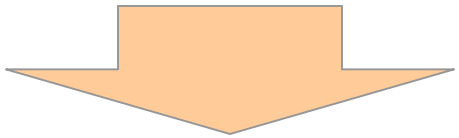
- 以下の観点より適正を分析する
  - 経験
  - 志向

No.	識別された役割	適正が高いと思われる役割
A	プロジェクトマネージャ:「プロジェクトマネジメント(4)」	アナリスト:「要求分析(3)」
B	アーキテクト:「ソフトウェアアーキテクチャ設計(4)」	アーキテクト:「ソフトウェアアーキテクチャ設計(4)」
C	アーキテクト:「アプリケーション設計(3)」	アーキテクト:「アプリケーション設計(3)」
D	アーキテクト:「アプリケーション設計(3)」	アナリスト:「要求分析(3)」
E	プロダクトスペシャリスト:データベース(4)」	プロダクトスペシャリスト:データベース(4)」
F	アーキテクト:「アプリケーション設計(3)」	アーキテクト:「データベース設計」
G	デベロッパ:「プログラミング(3)」	デベロッパ:「プログラミング(3)」
H	アーキテクト:「アプリケーション設計(3)」	デベロッパ:「プログラミング(3)」
I	デベロッパ:「プログラミング(2)」	デベロッパ:「プログラミング(2)」

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

導入フェーズ2：ポートフォリオ分析結果からアクションへ

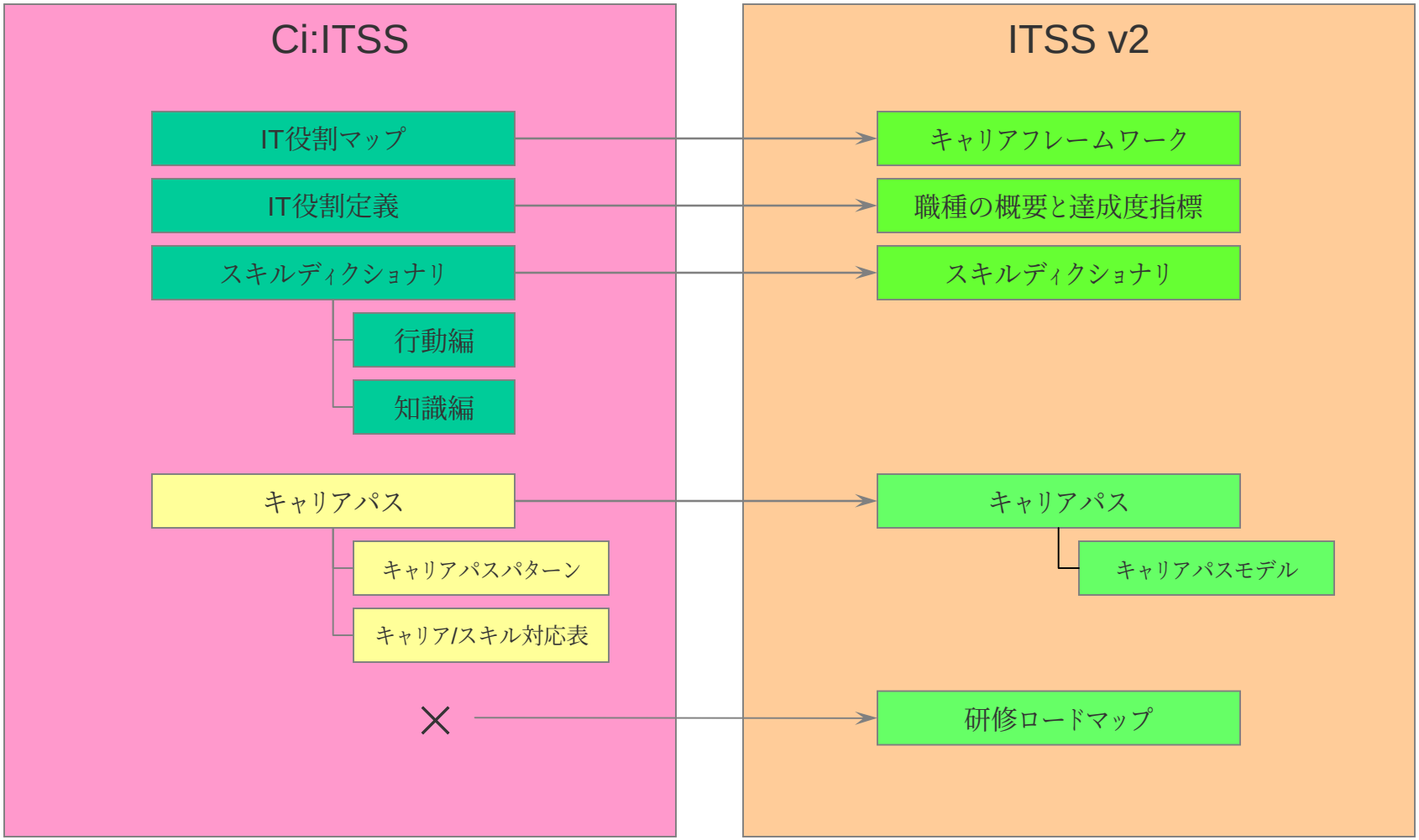
- **システム化業務要件をまとめ上げられるメンバーの不足**
  - IT業界が人材不足の状況で希望スキルを持った人材の採用ができない
    - ✓ 社内で育成する必要性
  - 各業務部署の業務内容理解が不足
    - ✓ 経験者を採用しても、業務内容理解までには時間が必要
- **日常のシステム運用と並行作業**
  - 運用など他の作業が発生するため、業務理解までに一層時間がかかる



情報システム部員の底上げとともに
業務部署からのIT企画メンバーへの育成と参画を推進

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ＩＴＳＳと当社版（Ci:ITSS）の差異：ドキュメント体系



Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ＩＴＳＳと当社版（Ci:ITSS）の差異：変更点の概要

①：レベル設定

6段階のレベルを設定した。
レベル6については、キャリアパスとして次のステップを明示するという目的を満たすため、
アナリスト、プロジェクトマネージャに設定。
ただしスキルは定義せず役割定義のみの設定とする。
レベル7については、社内に業界の技術リーダーは必要ないため削除した。
また、それぞれのレベル認定にはプロジェクトの人月などによる規模を対象としないこととした。

②：名称・用語について

システム寄りではなく、業務寄りであることを明示する名称・用語を採用した。
社内的にはキャリアパスがイメージできる分かりやすい名称・用語を採用した。

③：社員/アウトソーサーの区別

社員が担当すべき役割と、アウトソーサーが担当すべき役割が識別できるような情報を付加した。

④：定義の削除と追加

他部署にて行っている業務に関する職種を削除した。
また、社内特有の業務知識や技術項目などを追加した。

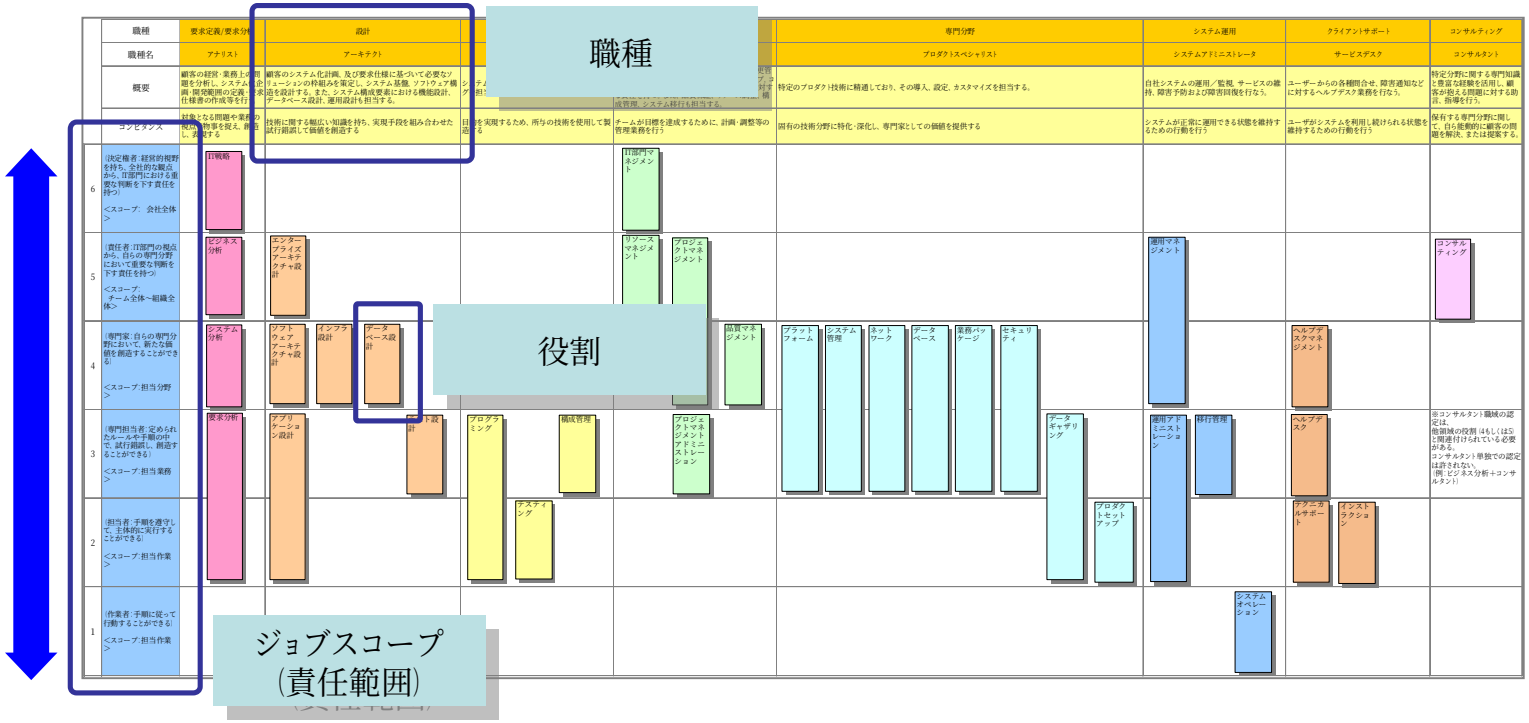
Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ＩＴＳＳと当社版（Ci:ITSS）の差異：IT役割マップ

◆「IT役割マップ」の位置付け

ＩＴ役割マップは、ドクターシーラボ情報システム部門における“役割”の位置付けを図示したもの。

“役割”は業務を集約した単位であるため、「IT役割マップ」は人材モデルではない。



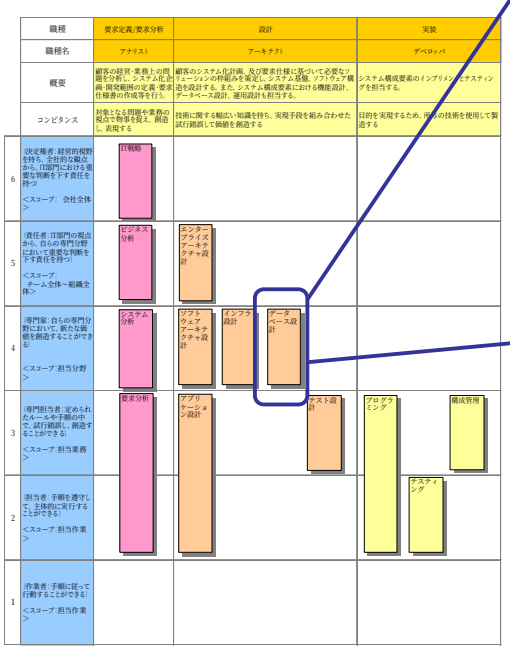
Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ITSSと当社版(Ci:ITSS)の差異:スキルディクショナリ

◆「スキルディクショナリ」の位置付け

「スキルディクショナリ」は、スキル項目を専門分野の観点でカテゴリ化されたものであり、「行動編」「知識編」から構成されている。

※ 一部抜粋



行動編

・・・ができるスキル。
特定の技術に依存しない普遍的な項目

システム化戦略・企画	業務分析	要求管理
●戦略立案	●業務分析	●要件定義作業のリード
○システム化企画	○業務フローの分析	ヒアリング計画の策定と実施
○情報化視点からの経営・	○業務フローの作成	ワークショップの進行
○業務のシステム化構想立	○業務フローの改善	アンケートの実施
○業務改善企画・提案	○対象組織の評価	○要求の収集と分類
○ソフトウェア/システム商	共通語彙の把握	○問題の収集
業務の目標設定と調整	利害関係者とビジネスプロ	●開発範囲の管理
○ビジネスモデルの定義		○要求の優先順位の管理
ビジネスルールの保守		要求管理計画書の作成
事業戦略コンサルティング		要求依存関係の管理
システム化企画		機能要求定義ガイドラインの
○RFP(提案依頼書)の作成		開発構想の立案
投資効果(ROI)の測定		ユーザ、他システムの識別
経営との調整		○ソフトウェア要求仕様書

知識編

・・・を知っているスキル
要素技術・プロダクト技術の進歩によって変動

システム化戦略・企画	業務分析	要求管理
●戦略立案	●業務分析	●要件定義作業のリード
○システム化企画	○業務フローの分析	ヒアリング計画の策定と実施
○情報化視点からの経営・	○業務フローの作成	ワークショップの進行
○業務のシステム化構想立	○業務フローの改善	アンケートの実施
○業務改善企画・提案	○対象組織の評価	○要求の収集と分類
○ソフトウェア/システム商	共通語彙の把握	○問題の収集
業務の目標設定と調整	利害関係者とビジネスプロ	●開発範囲の管理
○ビジネスモデルの定義		○要求の優先順位の管理
ビジネスルールの保守		要求管理計画書の作成
事業戦略コンサルティング		要求依存関係の管理
システム化企画		機能要求定義ガイドラインの
○RFP(提案依頼書)の作成		開発構想の立案
投資効果(ROI)の測定		ユーザ、他システムの識別
経営との調整		○ソフトウェア要求仕様書

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ＩＴＳＳと当社版（Ci:ITSS）の差異：IT役割定義

◆「IT役割定義」の位置付け

「IT役割定義」は、IT役割マップで定義された各役割について、
その概要と保有すべきスキルの対応を定義しています。

社員･外部フラグ　役割概要　スキル対応表　ITSS職種との対応

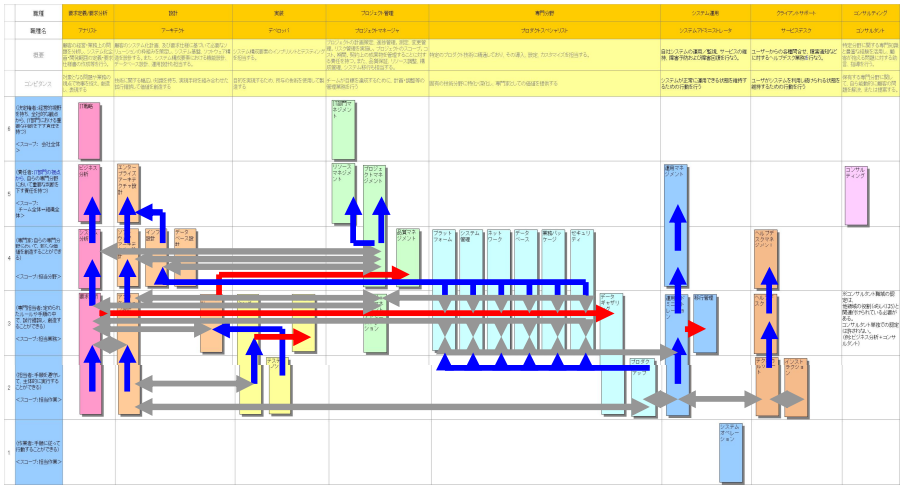
職種	職種名	社員	外部	役割	ジョブスコープ	概要	例	必要スキルタイプ:行動体系					必要スキルタイプ:知識体系								ITSS職種	ITSS専門分野	ITSSレベル
要求定義/要求分析	アナリスト	●	×	IT戦略	6	新規ビジネスの立ち上げ、およびビジネス設計について、経営戦略を考慮して、IT戦略を立案する。	経営企画 CIO														該当なし		-
		●	○	ビジネス分析	5	業務や組織に対する調査・分析および企画・改善提案を行う。ビジネスルールの策定やシステム化企画も実施する。	業務分析、BPR	●業務分析	●システム化戦略・企画				●ビジネス知識	●業務プロセス	●要求分析手法	●マネジメント					コンサルタント	IT	ハイレベル
		●	●	システム化分析	4	システム化に際して要求収集および要求定義をリードし、開発範囲を管理する。また要求を理解し、優先順位を調整する。	要求定義のリーダー ユーザとの要件の調整、要求仕様書の取りまとめ 要求工学を活用したスコープベースラインの管理	●要求管理	●要求分析・定義	●システム化戦略・企画・システム化企画			●ビジネス知識	●業務プロセス	●要求分析手法	●マネジメント					アプリケーションスペシャリスト	業務システム 業務パッケージ	ハイレベル
		●	●	要求分析	3	ユーザと開発チームのインターフェースとなって、要件の収集や調整を行う。	要求定義のサブリーダー	●要求分析・定義					●ビジネス知識	●要求分析手法							アプリケーションスペシャリスト	業務システム 業務パッケージ	ミドルレベル
		●	●	要求分析	2	指示に従い、要求定義に文書の作成、及び要求分析における各種作業を行う。	要求定義の作業メンバー	●要求分析・定義/要求定義					●ビジネス知識	●文書化							アプリケーションスペシャリスト	業務システム 業務パッケージ	エントリレベル
設計	アーキテクト	●	○	エンタープライズアーキテクチャ設計	5	システム全体の視点から、システム構造と設計指針についての決定を行う。また、システム構造および利用技術に責任を持って作業をリードする。	システム全体のアーキテクチャにおける技術的決定権	●システム設計	●ソフトウェアアーキテクチャ	●インフラ設計	●システム化戦略・企画・システム化企画		●システム分析設計手法	●アプリケーション技術	●ソフトウェア要素技術	●マネジメント					ITアーキテクト	インテグレーションアーキテクチャ	ハイレベル
		○	●	ソフトウェアアーキテクチャ設計	4	個別システムを対象に、技術の調査と選定・ソフトウェア構造の決定・設計チームのリードおよび、受け入れ時の検証をを行う。	アプリケーション開発での技術リーダー アプリケーションの基本設計	●システム設計	●ソフトウェアアーキテクチャ	●ソフトウェア設計			●システム分析設計手法	●アプリケーション技術	●ソフトウェア要素技術	●プログラミング言語	●マネジメント				ITアーキテクト	アプリケーションアーキテクチャ	ハイレベル
		●	●	アプリケーション設計	3	基本設計やアーキテクチャ方針に従って、機能レベルの詳細設計（モジュール設計、クラス設計など）を行う。また、コンポーネントの入出力設計や設計文書作成も含まれる。	アプリケーションの詳細設計 機能単位の設計を行う）	●ソフトウェア設計	●実装				●システム分析設計手法	●ソフトウェア要素技術	●プログラミング言語						アプリケーションスペシャリスト	業務システム 業務パッケージ	ミドルレベル
		●	●	アプリケーション設計	2	基本設計やアーキテクチャ方針に従って、機能レベルの詳細設計（モジュール設計、クラス設計など）を行う。	比較的小規模なシステム開発の詳細設計担当者 ※式なドキュメント作成経験は求められない	●ソフトウェア設計・機能の詳細設計	●実装				●システム分析設計手法	●ソフトウェア要素技術	●プログラミング言語						アプリケーションスペシャリスト	-	エントリレベル
		●	●	データベース設計	4	データベースステーブルの論理構造の定義を行い、必要に応じて物理テーブルの設計、インデックスの定義等、データベース固有の技術要素を用いた定義も行う。	データベースの論理設計 データベースの物理設計（外部人材のみ必須） テーブルやスキーマの定義	●データベース設計					●システム分析設計手法	●基盤技術/データベース							アプリケーションスペシャリスト	業務システム 業務パッケージ	ミドルレベル
		●	●	テスト設計	3	必要となるテストの識別と定義および、テスト対象に求められる品質に基づくテスト結果の定義、テストデータの準備およびテストカバレッジの確認を担当する。 また、テストツール、ガイドラインの準備等、テストの実装および自動化に必要な環境と手順の作成を担当する。	テスト項目の洗い出し テストケース作成	●テスト設計	●テスト				●システム分析設計手法	●テスティング							アプリケーションスペシャリスト	業務システム 業務パッケージ	ミドルレベル
		●	●	インフラ設計	4	個別システムを対象に、技術の調査と選定・システム基盤の設計を担当し、受け入れ時の検証も行う。加えて、運用フローや運用ツールの設計・最適化を行う。	インフラ、基盤構築でのリーダー システム基盤の基本設計 システムの運用フローを定義 運用環境（監視・バックアップ・定期ジョブ）の定義	●システム設計	●インフラ設計	●システム運用設計			●システム分析設計手法	●運用保守	●基盤技術/プラットフォーム	●基盤技術/システム管理	●基盤技術/ネットワーク	●基盤技術/データベース	●基盤技術/ミドルウェア	●マネジメント	ITアーキテクト	インフラストラクチャアーキテクチャ	ハイレベル

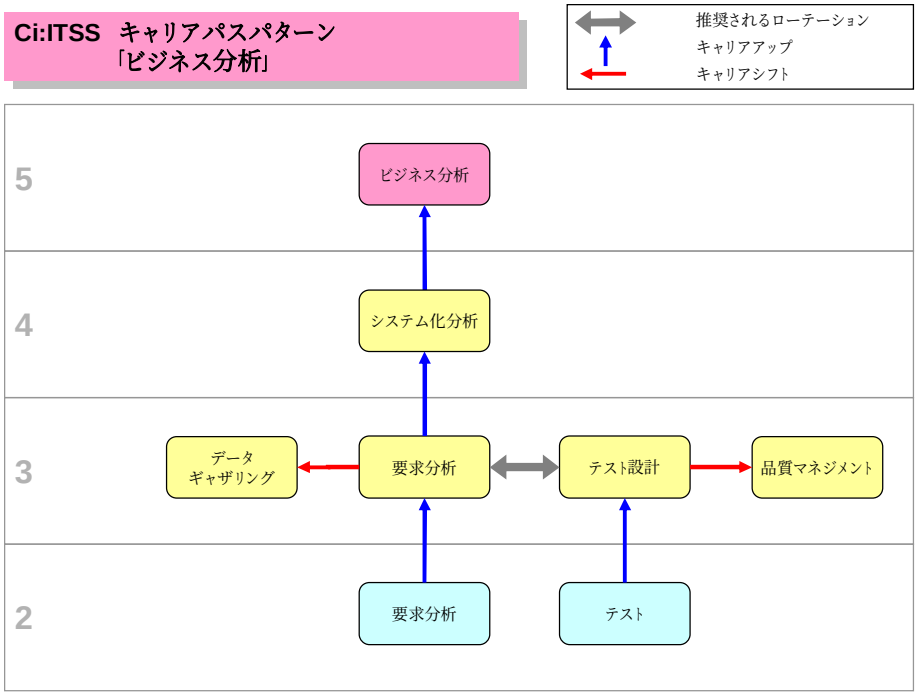
Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ＩＴＳＳと当社版（Ci:ITSS）の差異：キャリアパス

◆「キャリアパス」の位置付け

　ある特定の役割に向けたキャリアパスを図示したものであり、IT戦略・計画に合わせて任意にパターンを定義することができる。キャリアパスパターンは、役割レベルで表現されています。





Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo　Co., Ltd. All rights reserved.

今後の取り組み

➢ 来期IT予算策定に活用

①プロジェクト要員計画

-Ci:ITSSを利用してプロジェクトの開発計画立案を行う。

・プロジェクト毎のアサイン計画立案

②組織設計

-情報システム部全体における適正な配置計画立案を行う。

・来期の組織、要員配置

・来期の採用計画

・業務部門との役割分担の仕組み作り

“IT投資（人財・設備）最適化へ向けて”

➢ Ci:ITSSの運用・保守

①社員について

・人事評価確定後＝業績評価のレビュー実施後、年2回　9月、3月

・期中の入社に際しても、入社時の方針書作成時にアセスメント実施

②ビジネスパートナー・外部人材について

・常駐開始時に1回行う（採用面談時には行わない）

➢ IT企画～設計・開発・運用～評価プロセスの標準化

①Ci:ITSSをベースにプロセスの標準化を図る。

➢ 全社的にスキルスタンダード導入（知識体系のビジネス知識・業務プロセスの整備）

①ビジネス部門からIT部門への人材流動をスムーズに実行。

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.

ご清聴ありがとうございました。

Copyright© 2006 Dr.Ci:Labo Co., Ltd. All rights reserved.